音の旅人

演劇と音響と劇場と(14)

市来 邦比古

第七病棟旗揚げ公演、唐十郎作、佐藤信演出『ハーメルンの鼠』である。スタッフは前々回記述したが当日配布の資料から追記詳述する。作：唐十郎、演出：佐藤信、演出助手：飯島岱、作曲：福山敦夫、美術：和田平介、照明：吉本昇・白井良直・政野泰周・吉沢勲・青木博志・久保秀夫、音響：市来邦比古、殺陣：国井正弘、衣裳：大塚由美子・福島信子・大塚明子・石川愛子・串田久美子・サノいつ子・正木律子・樋口容子、宣伝美術：土耕一、舞台監督：高橋正篤、助手：久保克広・元木たけし、大道具：前身座大道具、制作：佐野葎子・増山真吾・毛利美紀子・梶原光正・伊東豊・西巻元である。

キャストは緑魔子、石橋蓮司、つじあきら、青木稔、浅香亨、石川邦彦、佐藤通佐、鈴木潤、戸部順平、野口淳夫、樋口容子、柳沼総一郎、山口昌弘、渡辺修、小林薫(状況劇場)、鈴木両全(早稲田小劇場)らである。チラシなどの宣材ができた後も参加者が増えていったのでたぶん総勢50名を超すメンバーが毎日出入りしていたと思う。この人が増えていっているというのが、桜社から引き続いてきた作り方であった。

最初の７人から始まり、場所探し、稽古、劇場つくりと進む中で俳優の経験者、未経験者、スタッフの経験者、未経験者が次第次第に集まってきた。来るもの拒まずで増えていった。

第七病棟は現代人劇場から桜社へと続く系譜の流れに位置付けられるが、演出家蜷川幸雄とたもとを分かち、劇作家清水邦夫の元、「風屋敷」を結成しようとしてとん挫し、演出家、劇作家なしでも自分たちの演劇づくりの志は変わらないとして「第七病棟」は結成された。その志に共鳴して多くのメンバーが集まったわけだが、何とか言葉にしてその志を明確にしたいと、稽古に並行して創立メンバーはミーティングを重ねていった。そのことは演出家佐藤信からは集団の課題として求められ、劇作家唐十郎からは『ハーメルンの鼠』という作品そのものが私たちへの課題として提出された。

私たちはなぜ今演劇をするのか、愚直なまでにまっすぐな問いかけを自分たち自身にかけて、走り始めた。その時一種のマニフェストのような「浮上宣言」というものを生み出した。その中で“聞こえてくるのが忘れられた存在・取りこぼした存在。忘れられた存在としての劇場―ぼくらは、ぼくらの世界を表出しうる存在としてすべての廃屋を劇場とする。また、時代がとりこぼしたもの、ぼくら

自身がとりこぼしたことに気づかなかった存在から、血を這うようなアッピールがあった。みずからが取りこぼしたものに対峙せよと、と。忘れ去られ、とりこぼされた存在を劇場―空間にこめて表現してゆく。それは、ぼくらの演劇する思想の武器となるのだ。”と宣言した。飯島岱、石橋蓮司、市来邦比古、増山真吾、緑魔子、吉本昇の発起人でこの時点で残っていた６人の連名だった。12月10日の初日版と25日の千穐楽版があり、初日開けてもずっと改訂をしていた。この宣言どおり劇場を探し、忘れ去られ、とりこぼされた存在をテーマに劇団は続いていくことになるのだった。

劇場は廃館となった映画館砂町富士館、観客席をすべて取り払い、平土間にして畳を敷き、客席とした。

この時のことを私は2000年第七病棟『雨の塔』パンフに記している

1976年12月10日、私たちの旗揚げの日。記録を見ると、当日売りはなんと1,200円だった。昔日の思いとでもいうのだろうか。私の中では昨日のようだと言えれば良いのかもしれないが、やはり遠い日である。「ヨークシャ嵐の……」と円卓の騎士が歌う大声が徹夜明けの頭に響いたあの日々。中央線のラッシュもかくやといわんばかりの満席の客席。息も白い寒い朝、始発から並んでいた観客もいた。薄ベニヤ張り、窓もない納戸で雑魚寝の日々。四畳半のこたつに何重にも輪をつくって食べた鍋。演出家に作品の内容を手短に話せと言われて脂汗を流した日。フェンシングのレッスンで「アンドウトウアー……」と、口と手と足がもつれた日、「浮上宣言」を出すという意志と頭がついてかなかった日々。劇場をどこにするかで飲んで食べたブタの耳。そしてフルートの調べと崩壊音、下水のゴホッゴホッ、ファンファーレと雨の音、立ち回りで大きく流したウエストサイドストーリーの音楽、そして繰り返し繰り返し流れた「さよならをもう一度」。今をかたち造ったあの出来事たち、仲間たち。もういない人、あり得ない出来事。それらを思うと情緒と感傷をバネにした私たちを確認できる。ポスターのスタッフ、キャストの名前を見ると、2000年の今日、ともに現場にいるのは、緑、石橋、和田、吉本、増山、毛利、そして私、市来の７名である。奇しくも第七病棟の名前のもととなった旗揚げの７名と同じ人数である。

これを記してから24年経ってしまった。ハーメルンについてはスナップ写真などが残っておらず、ノートもさほど残っていない。

『ハーメルンの鼠』より緑魔子と石橋蓮司

同 緑魔子と小林薫

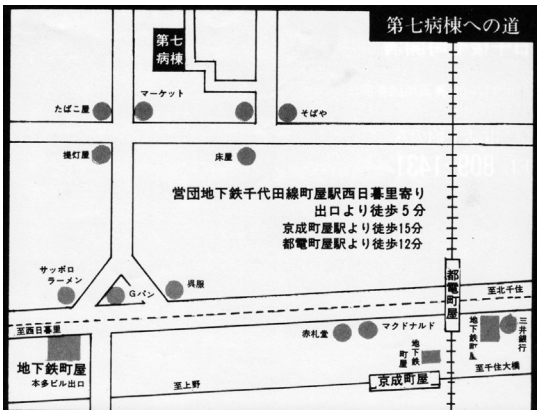
それほど夢中で全力投球だったのだと思う。

『ハーメルンの鼠』が終わって次の作品の準備をしようと土方巽さんの「アスベスト館」を借りて『あしたそこに花を挿そうよ』の稽古を始めた。一方で佐藤信作演出『ユリシーズ』を企画したが実現しなかった。その過程で飯島岱が抜け、田所陽子が加わった。エチュードをやりながら芝居を作ろうとしたり、ミーティングを重ねたりしているうちに十一、二人しかいなくなってしまった。1978年暮れから若手の大久保誠、渡辺修、沖忠雄、野口寛、浅香亨の五人で、佐藤信の一人芝居『控室』を上演しようと企画し、稽古が始まった。石橋蓮司が本格的に演出に携わった。1979年３月11日から15日までの５日間、「太陽神館」で上演した。これは本邦初演だった。現在渡辺修が佐藤信演出で上演し積み重ねている。

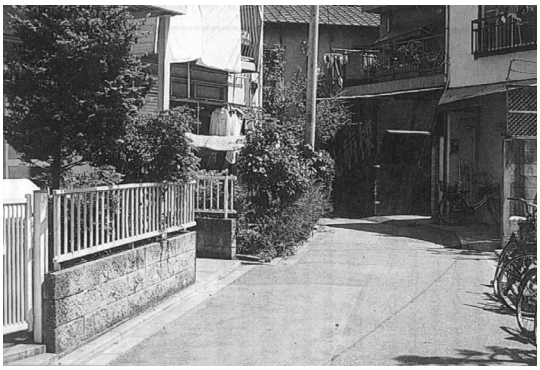
『控室』の時、下北沢のキャバレー跡や、学芸大学前のガソリンスタンドの２階などを転々と借りていたが、一回ごとに借りるのじゃなくて、自分たちの稽古場が必要だと皆の意志が固まった。稽古場捜しが始まった。４月から５月にかけて手分けして東京中の不動産屋を廻った。私も吉祥寺、荻窪など中央線沿線や有楽町線平和台や成増などを廻った。

沖忠雄が荒川区町屋駅近くのトロフィーなどを製造していた町工場跡を見つけてきた。町屋駅から最短で５分の曲がりくねった路地の奥にある４間四方の鉄骨造りのスペースである。高さが最大12尺（3.6ｍ）梁下で11尺あり、稽古場としては充分で２階に大家さん夫婦が住んでいる。フロアにあった台所を表の駐車スペースに増築し移動させ、事務所スペースとした。この時遮音については建築音響の勉強をした。ガラス戸とシャッターの開口部に吸音材を充てんした２重パネルの取り外し可能な防音パネルを作りはめ込んだ。

６月に入り新作のためのミーティングを重ねていった。質屋はどうだろうというアイデアが出た。また病棟ということで精神についての病の研究も始めた。レインの『引き裂か



町屋の稽古場への地図


路地を抜けたほうからみた稽古場

稽古場入り口と緑魔子の乗用車

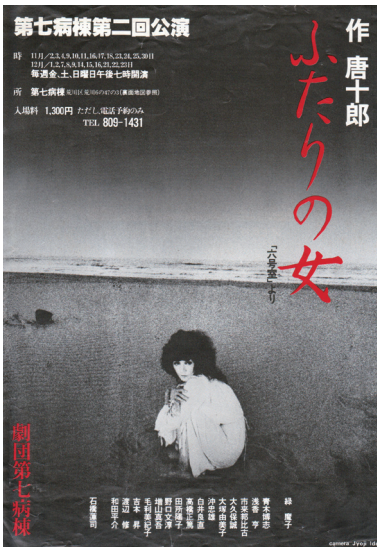
れた自己』が評判を生んでいたころである。議論が堂々巡りを始めるころ、石橋蓮司が唐十郎のラジオドラマ『恋の鞘当て』（「六号室―源氏物語『葵』」）を稽古場に持ってきた。緑魔子が葵を、李礼仙が六条を演じた作品である。唐十郎に依頼するときは自分たちのイメージを伝えて台本を書いてもらいたいと石橋は常日頃から言っていた。石橋蓮司は六条と葵の双方を緑魔子一人で演じると演劇になる。また主人公の光一が砂浜にラブレターを書く冒頭の場所だけですべての場面を演じるというアイデアを私たち劇団メンバーに語った。これを持って唐十郎に頼んでくるから待っていてほしいと７月唐十郎を訪ねていった。

８月、『恋の鞘当て』ではほんの数行だった精神病棟の場面が20分の患者たちの話となって渡された。９月半ばまでその場の稽古を繰り返し行った。１幕のみの試演会を、唐十郎を招いて行った。この稽古の時、私が石橋蓮司と背格好が似ているということでしばしばミザンセーヌ（位置取り）の代役に立たされたのはいい思い出である。

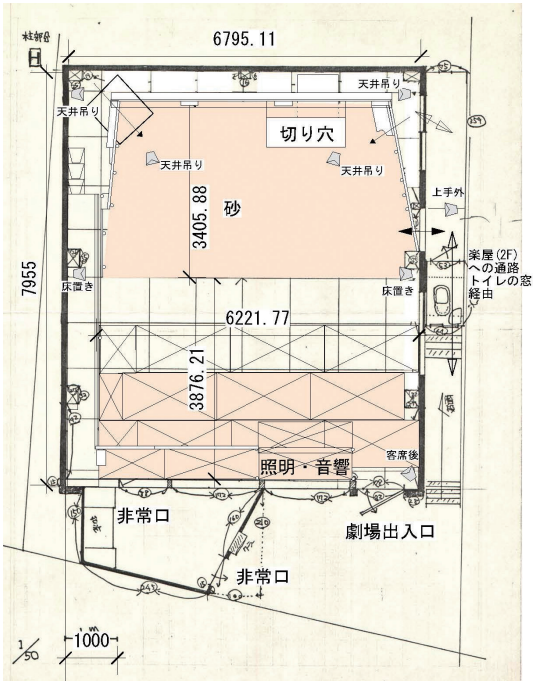
音楽や効果音もいれ、照明もステーション’70にあった調光器を使って簡易調光盤をつくり、音も照明も操作した。舞台監督の役割も行いながら稽古を詰めていった。

この日々が私にとっての演劇そのものの学習だったと思う。２幕以降の場面の稽古を石橋なりの構成で始めていた時、唐十郎から完成台本が渡された。題名は『ふたりの女―『六号室』より』。上演期日を11月初めから12月末の期間の毎週金、土、日と決めた。稽古場が住宅地の真ん中であり、隣のアパートの窓が接近してることや見知らぬ観客が路地を行き来することなどを考慮してだった。また劇団員が月火水はバイトなどで働けるだろうということも考えた。

装置プランが和田平介から出され、稽古用の装置を稽古場に組み、稽古を積み重ねた。稽古に並行して本番用の装置も劇団員総出で作った。舞台全体が砂浜という設定なので開



『ふたりの女』のチラシ



『ふたりの女』の仕込み図

帳場、八百屋（傾斜させる）を作るのだが、半日かけて作ったものが傾斜が違うということで作り直したり、砂をいろいろ試すとき、海砂は塩気がありべとつき、川砂は洗浄済みでも土が残り、白い衣裳が汚れてしまう。砂の総入れ替えも行った。二軒となりにある児童公園にホースで水を引きコーヒー袋に砂を入れ洗ったのだ。毎日稽古をするたびに砂が減っていく。本場に入っても砂袋一つぐらい消えていくので毎日洗浄して追加していった。

第七病棟第二回公演、作：唐十郎、演出：石橋蓮司と第七病棟『ふたりの女―『六号室』より』、所：荒川区荒川６丁目第七病棟、1979年11月２日（金）～12月22日（日）まで毎週金、土、日曜日の24回公演であった。スタッフは演出：石橋蓮司と第七病棟、美術：和田平介、照明：吉本昇、青木博志、白井良直、音響：市来邦比古、舞台監督：高橋正篤、野口文淳、制作：毛利美紀子、キャストは緑魔子、石橋蓮司、浅香亨、大久保誠、大塚由美子、沖忠雄、田所陽子、増山真吾、渡辺修である。

正確には26尺（4間２尺）×22尺（3間４尺）の空間の半分に舞台空間、半分に客席空間とし、下手側壁沿いに２尺の奥行きの桟橋のような橋掛かりが客席最後方から舞台奥まで通っている。舞台奥にはコンクリートの壁があり、その上は幅があり人が登れるようになっている。上手と下手は工事中の鉄パイプが組んであり、コンパネ合板で囲まれている。舞台奥下手に下水か何かの大きなパイプ状の口が空いていて演技上の動線となっている。上手手前は客入れの時間、コンパネ１枚分空けてありトイレの出入り口になっていて上演中は閉じられる。上手奥のコンパネ１枚開けられるようになっていて場面によっては出入口になる。役者のスタンバイは２階の大家さんの部屋を楽屋として利用させてもらい、外階段から塀を伝って階段下に入り、トイレの窓を通って、トイレのドアを抜け上手奥の窓を越えて舞台裏に入る。石橋蓮司も緑魔子もその動線だ。客席下手後方から橋掛かりに出るには非常口を通って入る。どの動線も皆いったん外を通るので雨の時は大変だった。

客席側は前方が畳敷き、それより後方が平台でつくった段床になっている。最後方の上部のパイプで組んだ足場に照明・音響のブースを設けた。客席上手の写真は公演の合間の光景だ。客席上手の写真に筆者がいる。また客席中央に主演の緑魔子が座っている。

客席の広さは巾6m20cm、奥行き3m90cmである。初日のころは60名ほどで満員になってしまった。段床を変えて立ち見を入れて90

舞台側下手

舞台側上手

名まで増やした。楽日近くには橋掛かりの上下にも入れて100名ほど入った。こうなると酸欠が心配となってくるので光が漏れないようにして開けられるところはあけ、換気扇をフル稼働にした。

客席下手

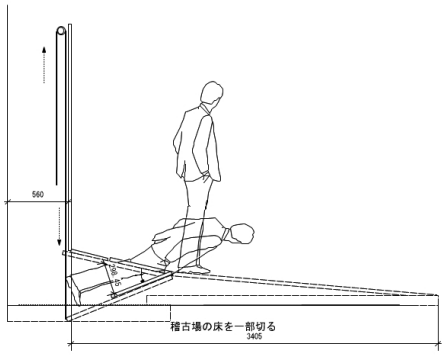
客席上手 左から3人目が筆者、座っているのが緑魔子

1幕は伊豆の精神病院の近くの浜辺で新婚の新妻、葵にあてた砂に書いたラブレターを読んでいる医師光一のモノローグから始まる。葵に似た患者に出会ったというのだ。一転して患者たちのサロンになる。浜松の方の病院を訪ねて実際の病棟を見学させてもらったりして役作りの参考にした。一人の女患者(六条)の過去が垣間見えようとしたとき、扉が開き院長の是光が看護婦を連れ、精神科医の光一を案内してくる。光一に女患者(六条)があなたと呼びかけ、部屋の鍵を渡す。この時ウィンドチャイム(鈴)の音色が響く。一貫して続く鍵＝六条＝鈴のモチーフを形成した。2幕で葵が六条と電話で話すシーンがあるが、台本上の六条の台詞をカットして鈴が鳴ることで、一人二役を成立させ、かつ場面の効果がより高まった。

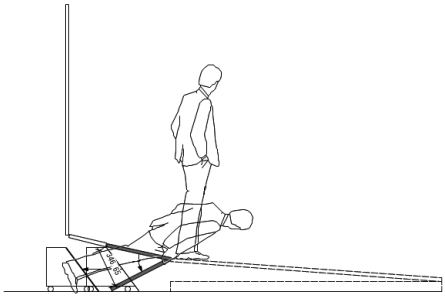
1幕はわずか20分強で休憩となる。2幕に入ると葵から六条へ、そして六条から葵へ、場面が変わるごとに緑魔子は2役を渡っていく。時間経過や場所の飛躍に音が重要な役割を持って劇に関わっていく。葵の自己破滅で劇は急展開する。最後葵にあてたラブレターを書く光一のもとへ六条とも葵ともつかない女がやってきて地の底へいざない、何もない浜辺が現れて幕となる。最後の地へ埋もれていくのはロープで砂が乗っている蓋を下ろし、奥から緑魔子、次いで石橋蓮司の足を引っ張ってもぐりこませる仕掛けだ。そのために稽古場の床を一部くりぬいた。1984年のすず

ラストシーン

地の底へ向かう最後の場面



初演の仕掛け



再演の仕掛け

なりの再演の時は蓋を斜めに滑らす台車を使用した。

ラストシーンにカザルスの鳥の歌を使用した。作品がなくて苦闘していた時にこの曲を使った場面で終わりたいという話をしていて、見事にはまったのだった。

❒『ふたりの女』の音響

繊細でかつダイナミックな音楽や効果音を場面に合わせて使用した。

六条のアパートで聞こえるハーモニカはブルースハープの第一人者八木のぶおに頼んで即興で吹いてもらった１節だ。オープニングMはヴァンゲリスの曲である。

この当時はオープンテープレコーダーである。それを４台、スピーカーは８台あるが基本は出力４系統のハンドメイドのミキサーに外部出力を付加して操作した。

緑魔子の台詞にぞくぞく感じながら操作をしていた。最後満場の拍手が起きるたび充実感一杯の毎日を過ごしていた。

12月に入るころに電話予約がいっぱいになり当日券を求めてくる人にお断りをするような毎日になった。そこで追加公演を行うことにした。1980年１月18日（金）～ ２月24日（日）までの毎週金、土、日曜日の18回公演である。それも１月の最初の週で２月末までの電話予約は一杯となった。

公演の手伝いをしてくれるスタッフが徐々に増えていき、下足番に舞台監督の高橋正篤通称ジャイアンツの妻となる大石静と仲間の永井愛が手伝いに来ていた。公演終了後稽古場を借りたいということだった。二人は二兎社という劇団を創設間もないころだった。

『ふたりの女』は劇団第七病棟として真の出発点となるような作品となった。そして私にとっても演劇の音づくり、選曲、効果音一つ一つの仕事に自信を持って取り組めるようになった作品である。書き留めておきたいエピソードはまだまだあるが今回はここまで。

唐十郎氏が亡くなられたとの報がこの文の校正中に入りました。

私の演劇の源である氏のご冥福を心よりお祈りいたします。

	場面	A リール	B リール	C リール	D リール
1	オープニング(本ベル)	ﾎﾟﾝﾎﾟﾝ船			波(客入れ)
2	プロローグ　浜辺		砂に書いたﾗﾌﾞﾚﾀｰ		
3				ｱﾀｯｸ波	
4	1場　病棟のサロン	風			
5			ｵｰﾌﾟﾆﾝｸﾞM		
6		風			波(LONG)
7			ﾃﾞﾓ		
8			ﾊｰﾓﾆｶ		
9		風			
10	2場　同じ		鈴1		
11			鈴2		
	休憩				
12	3場　レース場	ｴﾝｼﾞﾝふかし			
13				ﾚｰｽｽﾀｰﾄ	
14		ﾚｰｽ音			
15				砂に書いたﾗﾌﾞﾚﾀｰ	
16		通過1台			
17		通過2台			
18			事故		
19	4場　駐車場		蛍の光		
20			影の音楽		
21	5場　葵の家	虫			
22			TEL1		
23			TEL2		
24				鈴3	
25				鈴4	
26				鈴5	
27				鈴6	
28				鈴7	
29				鈴8	
30				鈴9	
31				鈴10	
32		狂いM			
33	6場　六条のアパート		ｻｲﾚﾝ		
34			ﾊｰﾓﾆｶ		
35			電車		
36	7場　葵の家の近く	葵の死のM			
37			ﾌﾞﾘｯｼﾞM		
38		(葵の死のM)			波
39	8場　病院の入り口		ｻｲﾚﾝ		
40				ドラM	
41	9場　6号室	波			
42	10場　場　浜辺		風		
43				ｶｻﾞﾙｽ	
44			ﾗｽﾄM		波
45	コール	砂に書いたﾗﾌﾞﾚﾀｰ			